
ただいま神様逃亡中

N澤巧T郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま神様逃亡中

【Zコード】

N2611A

【作者名】

澤巧丁郎

【あらすじ】

ニュース速報が突然驚愕の事実を伝えた。

夜、テレビを見ていると、

「臨時のニュースが入りました」

いきなり見ていた番組が切り替わり背広姿のアナウンサーが現れた。
「なつ！－ちょうどいいところだったのになんだよ一体！？まだどうかが戦争でもおっぱじめたか？それとも大災害に見舞われたか？」
すると画面の中の堅苦しい感じを漂わせるこの人の口から思いもよらぬ言葉が発せられた。

「たつた今、天国から神様が脱走しました」
理解するのに約1・5秒かかった。

「……なんじやそりや！－！－！？？」

テレビの中の男はたんたんと続ける。

「全世界に指名手配しています。見かけた人は早急にヘブンダイヤル××－××××－×××までおかけください。なお、有力情報には懸賞がかけられています」

「見かけた人つて神様なんて見たことないし」

「これが、脱走前夜に残された神様の映像です
画面が切り替わりそこに現れたのは……」

「親父じゃん！！！！？？？」

テレビに映し出された神様はまさしくオレが小さい頃に死んだ親父そのものだった。

「と、言つわけで、神様が脱走中ということで神様が戻られるまでご子息であるあなたが神様代理ということで」

背広姿でいかにも不健康で頬がやつれている男がペコペコと頭を下

げながら言った。

「無理だろ！－！なにがと、言つわけだよ。神様はなんだ？世襲制度
なのか！？普通神様補佐とかいんじやねえのかよ！－！ほら、天使く
んといんだろ天使くんとか」

そういうと不健康そうな男は右手を後頭部へ持つていき、気まずそ
うに言った。

「それがあいにく…地獄やら黄泉の国へみんな出張中なんですよね
え」

「だつたらさつさと連れ戻せや！－！こんな一大事のときに何やつて
んだ！－！社会人としてどうなんだ！？え！－！？？」
天使が社会人かどうかは怪しいものだが出張と言つてるので仕事
で出向いているということは確かである。

「そうしたいのはやまやまなんですがね、ポケベルがつながらなく
て」

内ポケットからポケベルを出しながら言つ。

「携帯にしろ！－！遅れてんだなあ天国つて。何十年前の代物だよ
1995年の代物だ。

「と、言つわけで、どうか神様代理になつてくれませんかねえ」
今までの話はなかつたかのように言つた。

「またと、言つわけでかよ。ヤダよそんなの。だつたらあんたがな
りやいいだろうが。てか、あんたは一体何もんだ！？」

よい子の皆さんは名乗らないような人を家に上げてはいけません。

「私はすでに役職があるので神様代理にはなれないんですよ。掛け
持ちは出来ないんです」

「その役職つてなんだよ」

すると男はさらつと言つてのけた。

「閻魔大王です」

「腰の低い閻魔大王だなおい！－！そんなんじや嘘みやぶれねえぞ！

！」

「そつなんですよねえ。押しに弱いんですよ。それに緊張しいだし。

胃腸が弱いんですよ。朝起きると必ず足がつるし……」

右手で腹を押さえながら顔面蒼白で囁く。

「もういいもういい……そんなん聞きたくないわ……」いつまでも調子悪くなるつての

「だつたらなつてくださいよ。私を助けると思つてえ。お願ひしますよ」。このとおりですから

後からなにやら箱を差し出す。

「そんな天国名物天使の輪菓子なんていうの差し出されてもですねえ。名物なのに聞いたことないしねえ」

見た目はただのドーナツなのはじこでは黙つておじい。

「だつたらこれなんてどうです？天使の羽ペン」

普通の羽ペンと違つ点を答えることが出来ないのはじこでは黙つておじい。

「羽ペンよつシャーペンのほうが使い勝手があるからなあ」「じゃあつじやあ。この神様ファースト写真集なんてのは」

ちゃんと閻魔大王さまへとサインが書いてあるのは黙つておじい。

「親父の写真集なんて見たかねえわ！」

「おかしいなあ。あの世だとベストセラーなのになあ」

「あの世とこの世を比べるな」

「それならこれはどうですか？閻魔大王推奨胃薬ハラ・イタナーラ・パッケージはもちろん閻魔大王さんだ。

「余計悪くなりそうだよあんた見てると」

「じゃあこれなんてのはどうです？閻魔大王式エアロビクスフィットネスピデオ完全版」

その笑顔は汗で輝いていた。

「余計不健康になりそうなんですけど」

「これならどうだ！？閻魔大王エキスたつぷり栄養ドリンク」

横に小さく“しほりたて”と書いてあるのは黙つておじい。

「エキスってなんだエキスって。それにドリンクじゃなくてドリンクだしね。ダオドーか？」

すると閻魔大王はしひれを切らした。

「だったらどの健康食品がいいんですか！？」「

「そう言つ問題じゃねえだろがよ！…話を戻せ戻せ！…俺が言つのもなんだけどさ」

「そうでしたそうでした。つい熱くなつてしまつて申し訳ありません。それではこの神様ファーストDVDなんか

初回限定版なのはココではあえて黙つておこつ。

「そこに戻つてどうすんだよ！…ファーストつてことはセカンドもあるのね！？」

「ライトとセンター。キヤツチャーンてのもありますが

ぞくぞくと出でくる。

「わけわからんねえよ！…いらねえよ！…ぜんつぶ持つて帰つてくれ！」

「なんて無欲な人なんだ！？」

そのまなざしはまるで神を見ているやつだった。

「無欲とかじやないから！…どれもこれも魅力が何にもねえだけだよ！…」

「やはりアナタのような人が神様になるべきなんです。お願ひします。プリーズ！…」

両手とおでこを地面に押し付けてお願ひする。

「なんで最後英語なんだよ。それに神様つて何やんのさ」

頭をあげて口をひらいた。

「神、それは全知全能で宇宙を創造し支配する唯一絶対の主宰者とされる存在。つて辞典に載つてたよ」

「辞典に頼つてんじやねえよ！…実際どんな仕事があんだけ聞いてんだよ！…神の意味ぐらい知つとるわ！…」

「おみそれしました。ええつとですね。神様はですね。なんていふですかねえ。まあ、あれですよ。それです。」

「どれだよ！…！…閻魔大王だろが地獄に突き落とすぞコラ！？」

その形相はまるで閻魔大王だ。それを見た閻魔大王は必至に取り繕

う。

「仕事内容は秘密なんですよ。なつた者しかわからないというか、教えてはならないみたいな噂が」

「噂ならいいだろうがよ。噂だつたら教えてくれよ」「なんでもちまたの奥様達の話題の的だそ�だ。

「噂といいますか、なんていうんでしょうねえ。まあ、あれですよ。それです。」

「だからどれだよ!!!!!! 閻魔大王だらうが逆腕ひしき十字固め決めるぞコラ！？」

その形相はまさしく閻魔大王もちびっちゃうくらいの形相だつた。「ですからなつてもらつてからお話しますから」

「なんだよなんだよ。せつかくなつてやるひつと思つてたのに」「本当ですか！？だつたらなつてください」

「教えてくれたらなる」

「ですから全知全能で宇宙を創造し支配する唯一」

「意味じやねえよ！－だから知つてるつてんだらうがよ－－紙やすりで顔の凹凸なくすぞこら！？」

その手には荒い紙やすりが握られている。

「六めんなさい。あ、間違えた。ごめんなさい」

「わざとだろてめえ！－どこの誰がゴメンを六めんつて間違つんだよ！？」

「ああはいはい。もういいですよ。そんなに断るんなじつちだつて最終手段を使うまでですよ」「なんだよ。その最後の手段つてのは」

何かが切れた閻魔大王は開き直つてリーサルウエポンを使った。

「あなたが死んだとき地獄に突き落としてくれるわつ－！」

「うわつ卑怯すぎるぞそれは！－最後の手段にもほどがあるぞ。恥を知れ恥じを！－脳裏に刻み込め！－嫌なら俺が彫刻刀で刻んでやる！－」

「地獄は苦しいですぞ。恐ろしいですぞ。辛いですぞ」

さつきとは一変して強気の姿勢だ。なんて意地が悪いんだ閻魔大王。私は失望する。

卷之三

「ええ、いいやつだなあ……！」

するとテレビが騒がしい。

「ただいま神様脱走事件に新たな動きがあつた模様です」

卷之三

「なんと、神様が見つかったとの事です。いま映像が……来てます

か?……はい、来てるようです。それではどうぞ」
画面が切り替わった。

バババババババ

『その神様。止まりなさい。止まりなさい』

暗闇の中を神様らしき人物が走っている。頭上が黄色く光っていて位置はよくわかる。

「おこおこ、ヘリコプターまで出動しちゃつてのよ。ってかどーだ
？暗くてよくわからんが……」
「後のほうにほんやり何かが見えますよ」
「ん~。あいや……俺ん家か！？？？」
「

ピンポンピンポンピンポンピンポン

怒涛の「」とくインターフォンが押される。

「神様がなにやらある家のインターフォンを押しています。逃げ込むつもりです」

ガチャヤ

「ドアが開きました。そして、中へと入っていきます。神様は一体何をする気なのでしょうか」

「神様～。戻つてきてくれたんですねえ～」

閻魔大王が抱きつこうとする。

「ええい誰が戻るか馬鹿者～～～」

足で蹴つて閻魔大王は床に転がつた。閻魔大王の顔は少し嬉しそうだ。

「そんなこと言つてないでわつたと戻つてくれ～～オレが神様代理にされるとこなんだぞ～～？」

すると神様は腰に両手を持つて行き、

「何事も経験だ。」

「ばつと言つた。」

「迷惑だつづの～～つてかてめえはなに逃げてんだよ～～ちゃん」と仕事まつとおしらダメ親父～～日本人の三大義務を守れ～～～

「もう死んでるからいいんだよ～～だ」

その顔はバカ丸出しだ。

「ちくしょう～～殺してやりたいけどすでに死んでやがる～～～」すると閻魔大王が目を覚まして神様に言つた。

「神様、今戻れば反省文くらいですみますから」

「軽いな～。脱走で反省文つて。あ、そうか。2万枚くらい書かされるのかな？」

「ええ？ 2枚も書けない」

神様は嫌な顔をしていじけた。

「小学生の感想文程度じゃねえか～～そんなんも書けねえのになんで神様なんてやつてんだよ～～」

「抽選でしたからねえ」

「懐かしそうに言つ。」

「お前ら神様を拝んでるやつら全員に謝れ～～抽選つてなんだよ抽選つて」

「番号を書いた紙を箱に入れて、それを前神様が引いて」

「だから抽選の意味くらいわかってるつちゅうの～～～漂白剤に

浸して脱色するやうに…」

閻魔大王は顔面蒼白だ。

「そういうえば、見ないうちに大きくなつたなあ。昔はミジンコくら
い小さかつたのに」

親指と人差し指で大きさを表現する。どう見ても親指と人差し指は
くつついている。

「そんなに小さくなつたよ。オレ4歳くらいだつたもん。ミリ単
位じやなかつたなあ」

そこで閻魔大王が感極まつた。

「感動の再会だ。バラ珍以来の感動だ」

汁という汁が流れ出る。これが閻魔大王エキスか！？

「どこで感動すんだよ…！親父逃亡犯だぞ！？家の周り囲まれちゃ
つてんだぞ！？」

「オレって人気者だなあ」

テレながら言う。その顔は少し得意げだ。

「誰一人サイン求めてねえから。全員自首を求めてるから」

「親子だからって恥ずかしがることはない。サインぐらい好きなだ
け書いてやろ」

その手にはすでにサインペンが握られている。

「だから誰も求めてねえって言つてんだろ」がよ…！一体何しに
来たんだよ！？」

「一つだけお前に言いたいことがあつて來たのだ…！まずひとつ
…！」

指を高々と突き上げる。

「絶対一つだけじゃないでしょ。まずつて言つちやつてるもんね。

「神様なんかに頼るのはもうやめだ…！」

「神様が言つちやつたよ」

「なぜなら神様は脱走中だからな…！いくら祈つたといふで願いは
とどかん…！」

「ここにこりやつてるからね。そりゃ届かないよ

「拝んでる暇があつたらその祈る両手で未来を掴み取れ！！！！本当に叶えたいんだつたら他にやることがあるはずだ！！！！」

「逃亡してなかつたらもつと威儀があつたんだけどねえ。でも逃亡してないと言えないとセリフだしなあ。まあ、神様としては失格だけど、父親としては合格かな」

息子は少し笑つた。

「それともうひとつ…！」

人差し指と中指を高々と突き上げる。

「やつぱり一つじゃ終わらなかつたか

「母さんをよろしくな

「へつ、神様だつたら自分の願いくらい自分で叶えろよ
「よう言いやがる」

プツ

いきなり部屋が真つ暗になる。

「ん？ 停電か？」

神様はハツとして言つた。

「強行突入かつ！？」

ガシャン

プシュー

窓ガラスが割られ、煙が部屋に充満した。

「ゴホツゴホツ！！」

「ゴツホ！！ゴツホ！！ヒマワリ！！ヒマワリ！！」

「そんなふうにセキ込む奴いねえだろ！！オホツ！！」

「どうだ、いたか？」

「こません。逃げられました！！」

重装備をした男達がしゃべっている。

「「ホツ……オエツ……オオオオエ……」

「吐くな閻魔大王！……」」うえり……男を見せり……大王としての威儀を見せるんだ……！」

「胃酸なら今すぐ見せれるんですけどね……」

先ほどとは違う汁という汁を垂れ流しながら言ひ。

「見せんでいい見せんで……もし出しても空中で飲み込め……」

「そんなんムチャなウエアツ……！」

「さやああああああああ……！」

部屋の中にすっぱい匂いが充満した。

「それでは、帰らせていただきます」

閻魔大王は来たときよりも不健康そうに見える。

「元気でな。すっぱい香りを臭うたびに思い出すよ

その顔が笑顔でも田は笑っていない。

「その節は申し訳ありませんでした。お詫びに受け取つてください」

ポケットから取り出し渡した。

「なになに？閻魔大王じるしの酔い止め薬ヨイ・マセーンつているかこんなもん！効き田ゼロだろ絶対……」

地面にたたきつけて足でぐしゃぐしゃにした。

「では、これで。へい、タクシー」

「タクシーで帰れちゃうの！？普通、空とか飛んでくよ」

「成田まで」

「飛行機！？直行便とか出てんの！？国際線でいけるんだ」

ツアードもつとお得だとこり」とせ口口では黙つてしまつ。

「シーコーネクスト・ウェイーク」

「来週また来るつもりか？もう来なくていいから」

「ハイヨーシルバー」

「馬じやないつて！金屬の塊だから」

「パカラッパカラッパカラッ」

「口で言つちやてる！」

タクシーはエンジン音をあげながら去つてこつた。

「まつたく。親父は今頃どうしてるんだか。」

家中に入り靴を脱いですっぱに香りがする部屋の前を息を止めて通り過ぎる。そしてあることここに気がついた。

「おふくろこねえ・・・

誰もいない部屋からテレビの音が聞こえてくる。

『神様はいぜんとして逃亡しています。一体どーじ。おつと、いましたいました！あ、あれ？一人増えます！女性です！神様が女性を連れてこます！あれば一体誰だ？女神か？神様は女神と共にいぜん逃亡中です！神様逃亡中！ただいま神様逃亡中です！』

(後書き)

神様を信仰しているすべての皆様へ。
ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2611a/>

ただいま神様逃亡中

2010年12月21日02時40分発行